

標準眼科学 第10版

大野 重昭, 木下 茂 (編) 水流 忠彦 (編集協力)

記念すべき『標準眼科学』第10版が発行された。3年ごとに必ず改訂されている教科書なので、次の11版がお目見えする頃には、『標準眼科学』の歴史は30年を数えることになる。これだけの長期間、本書を支えてこられた関係者の方々に、まずは敬意を表したい。

さて、言わずもがな、本書はわが国を代表する眼科学教科書の1冊である。これまで多くの医学生がこの本で眼科学を学んできたし、またそのなかから眼科に入学し、研修医になってからもお世話になったという人も少なくないであろう。ここまで多くの読者に支持された『標準眼科学』の魅力を、10版を手にして改めて考えてみた。

まず、内容がシンプルでわかりやすい。実はこれが言うは易しで、実際は難しい。改訂によって本の厚みが増えないようにバランスを取りながら編集するのは並大抵の努力ではできないと忖察している。医学生や研修医は忙しい。彼らが欲しているのは、まさに本書のような、最新の知見を加えつつ、読み通せるだけの分量で眼科学全体を見渡せる教科書であろう。記述そのものも冗長な説明を排しており、非常に読みやすい。

次に、改訂の間隔である。3年ごとに必ず改訂されていることにより、常に新しい情報が載っている。これは、読者が安心してその教科書で学ぶために重要な条件であるが、実現するのはこれもなかなか難しいことである。これまで都合9回の改訂をすべて3年間隔

で行ってきたことは驚嘆に値する。編著者、出版社ともに相当の熱意で取り組んでいることの表れであろう。

そして、美しい。いまでこそ眼科の書籍はオールカラーのものが多かったが、『標準眼科学』はカラー印刷がまだまだ高価であった時代から4色刷りであった。誌面構成もビジュアルに作られており、眼底写真などの美しさも特筆すべきものがある。読者が手に取りたいと思うのも当然である。

以上、述べたことは、過去の版も含めこれまでの『標準眼科学』すべてに共通する特長であるが、さらにこの第10版では、ますます重要性が高まる「神経眼科」の章の新設や、付録の国試問題解説など、節目の改訂にふさわしい魅力的な内容が加わった。新進気鋭の新しい執筆者も多く加わり、まさに磐石の構えである。昨今、医学生の教科書離れが進んでいると言われているが、こと眼科に関して言えば、今後も『標準眼科学』にお世話になる読者は多くなりそうである。

大阪大学大学院医学系研究科眼科学講座教授
田野保雄

●B5 頁384 2007年

定価7,350円(本体7,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-00380-3] 医学書院刊